The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	白瀧幾之助作《ペチュニア》《鶏頭》の制作背景に関する考察 : サカタのタネ創業者 坂田武雄との関係を中心に
Author(s)	阿部, 亜紀
Citation	デザイン理論. 2022, 80, p. 71-83
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/89275
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

白瀧幾之助作《ペチュニア》《鶏頭》の制作背景に関する考察

サカタのタネ創業者 坂田武雄との関係を中心に

阿　部　亜　紀

キーワード
洋画，花，品種改良，園芸，品評会
Western-style painting, Flowers, Flowers Breed improvement, Horticulture, Flowers show

序論
1. 白瀧幾之助と坂田武雄の関係
2. 坂田武雄の洋画との関わり
3. ペチュニア
4. 鶏頭
結論

序論

白瀧幾之助（1873–1960）（図 1）は，明治後期から昭和期にかけて白馬会，光風会，官展を中心に活動した洋画家である。東京美術学校の卒業制作《稽古》（1897）は個人の画業としてはもちろん，明治の洋画を代表する一作として知られる。そのため白瀧は風俗画を得意とした画家として取り上げられることが多いが，大正 2 年（1913）には丸山晩霞（1867–1942）らと日本水彩画会を，昭和 2 年（1927）には岡田三郎助（1869–1939）らと日本テンペラ画会を立ち上げるなど，洋画家という評価におさまることのない幅広い創作活動を展開した。昭和 27 年（1952）には洋画界に尽力した功績を認められ，日本芸術院恩賜賞を受賞している。

図 1　白瀧幾之助肖像

本論が注目するのは，白瀧が花をモチーフに描いた一連の作品である。特筆するまでもなく，花は洋画，日本画問わず多くの画家が題材にしたモチーフだが，彼の場合は花とさらに特別な関係を有していた。その背景には，白瀧が種苗会社である株式会社サカタのタネの創業者・坂田武雄（1888–1984）と縁戚関係にあったことが挙げられる。[1]

本稿は，第 245 回例会（2021 年 5 月 8 日，オンライン）での発表にもとづく。

20 世紀前半は，花の品種改良の技術が発達し，多種多様な新品種の開発・普及が世界的に進んだ時代であった。日本でも洋風建築や園芸趣味が普及する中，より栽培しやすく，より美しい花への需要が高まり続けていた。この只中，坂田もペチュニアを中心に新たな花の品種を生み出し，世界へと発信していたのである。白瀧は坂田との私的な交流があったため，誰よりも早く新しい花に触れ，描くことができる立場にあったのは想像に難くない。こうして発展を続ける花を，洋画家が描いていたとすれば，画題の研究に新たな視点を提案するものになるだろう。このような意図を以って，本論では坂田が海外の品評会で受賞した新品種の花と，これまで知られていなかった白瀧の花を題材にした作品を紐付け，比較検討する。

1．白瀧幾之助と坂田武雄の関係

白瀧幾之助は明治 6 年（1873）3 月 17 日，豊岡県朝来郡（現在の兵庫県朝来市）生野奥銀谷町に父・浜沖之助，母・美代の次男として生まれた。画学生時代は生巧館画塾で山本芳翠（1850–1906）に，天真道場および東京美術学校で黒田清輝（1866–1924）に，明治 40 年（1907）のフランス留学中にはラファエル・コラン（Raphaël Collin, 1950–1916）に師事した。帰国後は第 8 回文部省美術展覧会で二等賞を受賞し，帝国美術院展覧会の審査員を務めるなど，官展系の画家として活動している。[2] 私生活では明治 44 年（1911）に横浜の間島家の娘・美代と婚姻を結んだ。白瀧は長女・美保（享年 4），次女・須磨，長男・弥彦の 3 子に恵まれ，このうち次女の須磨が長野の資産家であった木戸傳一郎の元へ嫁ぐことになる。後述の通り，傳一郎は坂田の妻の弟にあたる。

坂田武雄は，明治 21 年（1888）12 月 15 日，九州出身の父・伝蔵と母・邑の間に 8 人兄弟の長男として東京で生まれた。明治 42 年（1909）に 20 歳で園芸や種苗の基礎を学ぶためアメリカへと旅立ち，イギリス 6 カ月，オランダ 3 カ月を経て再渡米後，大正 2 年（1913）に帰国。その後，神奈川県横浜市にて苗木事業の坂田農園を設立した。当初は欧米向けに百合の球根や苗木の輸出をしていたが，先行きに不安を抱いた坂田は大正 5 年（1916）に種子販売に転換し，特にペチュニアでは海外で種子の開発を評価された。その後は，種子の開発が国内外で評価され，事業を軌道に乗せたことで知られる。[3]

坂田は大正 15 年（1926）9 月，サカタのタネの取引先である横浜正金銀行に勤めていた一之宮鈴太郎の紹介により，木戸傳一郎の姉・木戸美代と見合い結婚をした。当時坂田が 39 歳，美代が 22 歳であった。美代の父である木戸傳（生没年不詳）は日本での弁理士の第一人者として知られる。さらに，坂田の妹・富美は，白瀧の妻の出身である間島家との関わりについて，「兄がまだ独身で，母や私共と一緒に，神奈川に住んでおりました頃のことでございます。兄は毎週日曜日を，鎌倉の間島様（故三井銀行常務）のお宅で過ごさせて頂くことが多

うございました。」[4] と回想しており，その交流は少なくとも坂田の結婚前まで続いていたと綴っている。これを踏まえると，坂田は独身の頃から，白瀧やその妻・美代と交流を持っていた可能性も考えられるだろう。その後，白瀧の娘・須磨が木戸家に嫁いだことで，白瀧と坂田は親戚関係になった。坂田の息子・正之は，「白滝幾之助画伯は，同氏の令嬢が，母美代の弟木戸伝一郎と結婚され，美代の義妹になったという因縁もあり，時々大船の家にも見えていたことを覚えている」[5] と回想している。

白瀧の旧蔵と考察され，現在京都女子大学前﨑研究室で保管されている「白瀧幾之助写真群」[6] には，坂田から白瀧に宛てた封筒が含まれていた。表面には，「東京市大森区田園調布四ノ二〇七　白瀧幾之助様」と記載されており，その中には北海道のスキーツアーの参加時に撮影された坂田の単体写真 1 点，彼らが 2 人で写る写真 1 点（図 2），風景写真 12 点の計 14 点が含まれていた。なお，封筒に貼られた切手の元号は「15 年」としか確認することはできなかったが，『東京美術学校卒業生名簿』（東京美術学校々友会）によると白瀧の住所は昭和 7 年（1932）から，田園調布の住所となっている。さらに，封筒に使用されている切手も大正 2 年（1913）から昭和 12 年（1937）に発行された田沢切手の可能性が高く，撮影年は昭和 15 年（1940），白瀧 67 歳，坂田 52 歳の歳だと推定できる。

図 2 （右）坂田武雄（左）白瀧幾之助

2. 坂田武雄の洋画との関わり

坂田武雄はサカタのタネ創業者であることのほか，西洋画を蒐集したことでも知られる。現在横浜美術館に所蔵されている「坂田コレクション」は，坂田が亡くなる前年の昭和 58 年（1983）に同館へ寄贈したもので，ウジェーヌ・ドラクロワ（Ferdinand Victor Eugène Delacroix, 1798–1863），ギュスターヴ・モロー（Gustave Moreau, 1826–1898），カミーユ・ピサロ（Camille Pissarro, 1830–1903）など全 53 作品に及ぶ。坂田のコレクション蒐集について，息子の坂田正之は白瀧をはじめとする洋画家と交流があったこと，そして「後年武雄が洋画に趣味を持ち，洋画のコレクションをしたのも，祖母の弟に画家がおり，また有名な洋画家の友人が多かったことが，その遠因になっていたのではないか，と思われる。即ち，邑

の弟で，重高の長男銈重郎は中丸精十郎の画塾で学び，雅号は金陵，九州の中学校で絵の教師をする傍ら，画家としても，相当な人材であったらしいが，惜しくも若くして亡くなった」[7] と，祖母の弟に画家がいたことも遠因ではないかと推測している。さらに続けて，「邑の末弟秀三郎の久留米明善校での同級生の親友に，有名な洋画家青木繁がおり，またその親友に，久留米出身の同年生れの有名な洋画家坂本繁二郎がいる。青木繁はよく早川家に遊びに来て，邑の末妹に当たる糸代をモデルにして絵を描き，宿命の絵と言われる「秋声」も糸代をモデルにして描いたものである」[8] と，坂田の親戚も画家との関わりがあった事実が記されていた。

銈重郎の同門には，大正 2 年（1913）に白瀧らと日本水彩画会を立ち上げた真野紀太郎（1871–1958），同じく水彩画の普及に尽力をした大下藤次郎（1870–1911），山中湖堂（生没年不詳）などがおり，坂田とは親しく交流していたという。[9] 中でも，薔薇の名手と呼ばれた真野紀太郎と坂田との関係について，正之は「（真野に）八重ペチュニア，金魚草，ばら等，さらに茅ヶ崎試験場のばら花壇など，今でも当社に掛けてある花の絵を画いて頂いた」[10] と述べている。要するに，彼はサカタのタネの花の絵を依頼されていたのだ。

これは白瀧にも当てはまり，正之は同著で「後年当社（サカタのタネ）の花の絵を描いて頂いたり，武雄と美代の肖像画を描いて頂いた白滝幾之助画伯」[11] と回想している。資料や記録からは坂田から白瀧に依頼された花の品種の詳細は不明である。しかし，社長室で写された椅子に座る坂田の背後，左奥の壁には，明らかに洋画家が描いたであろう 1 枚の花の絵が掲げられており，その画風から筆者はこれを白瀧の作ではないかと推測している。（図 3）

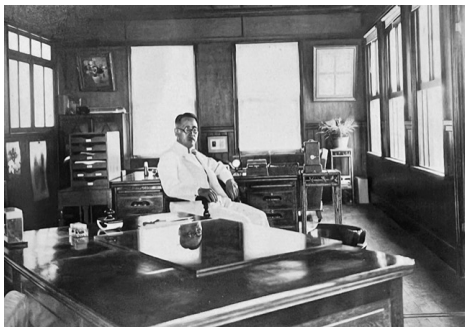

図 3　1944 年本町本社（現東京銀行所在地）の社長室

3. ペチュニア

白瀧は日本美術学院出版の『洋画講義』所収の「油絵講義」で次のように述べている。「風景畫中の花を描く時とは違つてスチルライフ（静物畫）としての花を描寫する場合には，自然花そのものゝ通有性であるデリカシイ（繊細）といふことに最も注意深き観察を要することは云ふまでもない。」[12] このように花の描き方を特筆していることからも推察できるとおり，

彼は生涯に渡って，パンジー，芍薬，百合，牡丹，菊，椿，ミモサ，紫陽花など多くの花の絵を描いた。

ここからは白瀧が描いた《ペチュニア》《鶏頭》と，坂田の開発した花との関係を検討したい。ペチュニアは日本で「ツクバネアサガオ」または「朝鮮朝顔」という名で知られる夏の花で，園芸趣味の拡大によって大正時代頃から人気になった花とされる。同時代の書籍『田園趣味家庭園芸詳説』では，栽培方法や特徴について「ペチユニアの花は朝顔によく似て居る處から筑波根朝顔（ママ）の名が付たそうであります。茎葉に少しの悪臭を持つて居ますが花には紅紫白紋等色々ありまして其形朝顔に似て然も直立し普通の朝顔と異り一日中日光に直射されつつ開花して居ます加ふるに多くの花を付けますので切花として最適したものであります。」[13] と解説されている。人気はその後も継続し，昭和 56 年（1981）発行の『花筐：坂田武雄の足跡』では「花のかたちのよさ，色彩の多彩さなどから，夏の花卉として，人々から最も愛されている花である。」[14] と紹介されている。しかし，絵画においてはそれほど取り上げられる品種ではなかったようだ。

白瀧によって描かれた 2 点の作品は，いずれも《ペチュニア》（図 4，5）と題されている。その形状は特徴的で，一般的に知られる一重咲きのペチュニアではなく，花びらが複雑に交差する「八重咲ペチュニア」が写しとられている。

図 4　白瀧幾之助《ペチュニア》（1938 年頃）個人蔵

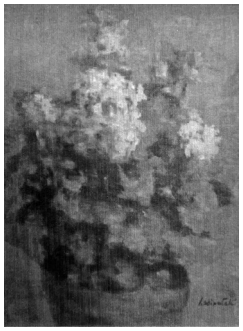

図 5　白瀧幾之助《ペチュニア》（1938 年頃）個人蔵

図 4 は，昭和 13 年（1938）頃の作で，地面に植わる紫色のペチュニアが板に描かれている。青々と茂る緑の葉と濃い紫色の花は補色を為し，画面にメリハリをもたせている。その形状は抽象的に描写されているが，全体の配色はもちろん，陰影表現や運筆など細部まで意識されており，結果，近距離で見ると個々の「色」が強調されるが，一歩下がって見ると，花弁が複雑に折り重なった花の姿が現れる作品だ。

図 5 は，白い八重咲きのペチュニアをモデルにした作品である。植木鉢に植えられて蕾，二分咲き，十分咲きと段階的な花の描写がなされており，右側から差し込む光にほんのりと照

らされている。右下には「I. Shirataki」との署名が確認でき，制作時期は昭和 13 年（1938）頃とされる。どちらの作品にも，花弁が特徴的な八重咲きペチュニアが描かれていることは明白である。

八重咲きペチュニアは，株式会社サカタのタネにとって会社の経営を軌道に乗せた記念的な花だ。坂田は海外実修からの帰国後，ペチュニアを含む数種類の種子サンプルを持ち帰った。それらの種子を東京の西ヶ原にある農商務省の農事試験場に勤めていた寺尾博（1883–1961）に研究素材として提供し，寺尾と同試験場で働く禹長春（1898–1959）が，共同で栽培・研究をおこなう中，純系の八重咲きペチュニア種の育成法を発見した。[15] 寺尾はその育成理論を確立し，試験場内で栽培を行ったが，当時の日本市場には需要がないものとされ，研究の継続は認められなかったという。そして後に坂田が苗木業から種子業へ転換した折，寺尾は坂田にこの研究成果を託した。そして坂田は数年をかけて八重咲きペチュニアの育成法の確立に成功した。

昭和 5 年（1930），坂田はペチュニア人気の可能性を見極めると，茅ヶ崎に約 4 ヘクタールの農地を借受け，温室での大規模栽培に着手した。そして，翌年に完全八重咲きペチュニア「ビクトリアスミックス」の育成に世界で初めて成功した。当時の園芸先進国であったアメリカでは「五〇％ぐらいが八重咲きで，あとの五〇％は一重咲きのものが出来る，というものでしかなかった。」[16] ため，植えたすべての種子から八重咲のペチュニアが咲くというのは，まさしく世界的な快挙だったのである。

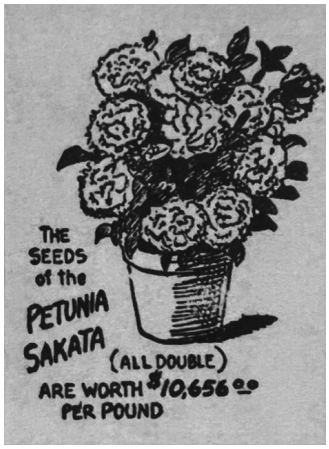

図 6 「シカゴ・ヘラルド・エグザミナー」に掲載された
オール・ダブル・ペチュニアとその価格（1935 年 6 月 20 日）

昭和 9 年（1934）には，坂田が開発した「ビクトリアスミックス」と名付けられた八重咲ペチュニアが，世界で最も権威のある種苗審査会とされていた全米種苗審査会（All-America Selections 以下 AAS）[17] で銀賞を受賞した。このニュースは国内外で注目され，世界のペチュ

ニア市場を席巻するという快挙を成し遂げたのである。『リーダーズダイジェスト』に掲載された文章では，「坂田武雄 ── この人の名は，日本国内でよりも海外でのほうが通りがよいかもしれない。ペチュニア（ツクバネアサガオ）の坂田，花の坂田といえば，外国の育種家の間ではだれ知らぬ者はないのである」[18] と綴られている。同種は瞬く間に世界各国から注文が殺到し，一時は末端価格で金の 20 倍，1 ポンド（約 454g）10,656 ドルという高値で取引をされた。（図 6）サカタのタネは，ペチュニアでの成功によって世界的に知名度を上げ，日本を代表する種苗会社に発展したのである。

白瀧が描いた 2 点のペチュニアの絵は，その花弁の描写から，いずれも「八重咲ペチュニア」であることは明白である。AAS での坂田の最初の受賞が昭和 9 年（1934）であったことを考慮すると，昭和 13 年（1938）頃に描かれた《ペチュニア》2 点は，その後の海外市場での成功を受けて描かれた可能性も考えられるかもしれない。

以後，ペチュニアの改良種は毎年のように国際品評会で受賞し，白瀧が亡くなる昭和 35 年（1960）までに，昭和 13 年（1938）受賞の「ブルーゼム」から昭和 32 年（1957）受賞の「マルチフローラグリッタース」まで，計 9 個のメダルを受けた。[19] また，昭和 40 年（1965）の AAS では，外国人として初めて特別賞の「シルバーメタリオン牌」を受賞している。しかし，日本での八重咲ペチュニアの育成難易度は比較的高く，長期的な大衆化には繋がらなかったようだ。白瀧が紫の《ペチュニア》を描いてから 8 年後，戦後のペチュニアの受け入れられ方については次のような記述がされている。「（ペチュニアは）戦後はイマイチ元気がなかった。もともとウイルス病に弱く，栽培がむずかしかったが，このころになると魅力的な品種があまりできなくなり，園芸愛好家に飽きられはじめたからである。」[20] このような背景から，当時八重咲ペチュニアを描く機会を得た画家は多くなかったと考えられ，白瀧が描いた《ペチュニア》と近代園芸の特異な関連性を見出すことができた。

4. 鶏頭

奈良時代にはすでに日本に渡来していたとされる鶏頭は，日本人にとって馴染み深く，古くから絵の題材に取り上げられてきた品種である。鶏冠の「冠」の発音が官僚の「官」と同じであるため，官位に就くという意味があり文人墨客に好まれた。[21]《ペチュニア》と同様に，白瀧は鶏頭を描いた作品も数点残している。その代表的なものが《鶏頭》（図 7）と題された作品で，真紅の大きな花頭をもち，すぐ下から青々とした葉が繁茂する姿が写されている。本作もペチュニアと同様，板に描かれており，右下には「志らたき」の署名が確認できる。この署名は若描きの作品には使用例がなく，後年の作品であることが窺える。

白瀧は「油絵講義」中で「紅味を帯びた花の場合には緑色を基調とした鼠色，又は之に近

図７　白瀧幾之助《鶏頭》
（大正～昭和期）個人蔵

図８　フレームオブファイヤー

い色のバツクを選ぶことは色彩のコントラストの上に好ましい結果が見られるのであらう」[22]としたためており，本作では事実その通りに描かれている。

鶏頭はペチュニアと同様に坂田武雄が改良を積極的に進めた品種であった。サカタのタネは先述のペチュニア「ビクトリアスミックス」が AAS で初受賞した翌年の昭和 10 年（1935），鶏頭の新品種「フレームオブファイヤー」で 2 度目の入賞を果たしている。本品種は長年詳細が不明であったが，同名の花の写真が昭和 16 年（1941）にフィラデルフィアで発行された園芸情報誌 *Maule's Seed Book* に掲載されていることを確認することができた。（図 8）写真の説明には以下のようにある。

> “Flame of Fire Plants grow about 1 1/2 ft. tall. Branch out in candelabra-shape, each branch bears a large, almost round, fiery scarlet flower head. Pkt.”[23]

この記載から「フレームオブファイヤー」は，高さ 45.72 センチに成長する品種で，花頭は球体型に近く，色は真紅，枝葉は燭台のように広がり，大きいことが分かる。3.5g 当たり 50 セントという販売価格は，同誌に掲載される他の花と比較しても高価な部類に入り，希少な品種と位置付けられていたことが窺われる。この写真を白瀧作の《鶏頭》と比較してみると，真紅の花頭，横に広がる葉，大きな枝などいくつかの共通点が見出せるが，花頭の形が近似しているとは判断し難い。

「フレームオブファイヤー」の受賞から 29 年後の昭和 39 年（1964），サカタのタネは「ファイヤー・グロー」という品種で 2 度目の AAS 受賞を果たした。この花は，久留米鶏頭の品種改良家として業界では名の知れた「親爺さん」が自慢にしていた花で，坂田はそこから種を分けてもらい，より高度に，より揃った品種へと改良したのだという。[24] このエピソードの具体的な時期については明らかになっていない。

現存する「ファイヤー・グロー」の写真と白瀧の《鶏頭》（図 7）を比較したところ，色や形状が酷似していることが明らかになった。「ファイヤー・グロー」が AAS を受賞した年は，白瀧の没後 4 年目にあたる。したがって，《鶏頭》のモデルが同種に近い品種である場合，AAS 出品前に試験的に育成していたもの，もしくはそれに通じる品種を描いた可能性も指摘される。実際，坂田が白瀧に花の種子を贈っていたのかは定かではない。しかし，坂田よりも 2 歳年上の叔母・三上糸世は，後年「（坂田武雄は）バラや花物の種子を送って下さいました」[25] と回想しており，彼が親族に花の種子を贈っていた事実が確認されている。

白瀧が描いた花冠が玉のような鶏頭は，本作の他にも 2 点確認されている（図 10，11）。いずれも地面に植えられたままの様子であることから，坂田から種子を受け取り，多様な植物を植えていた自宅の庭先で自ら育てあげ，図 10 のように枯れゆくまで作画したという見方も考えられるかもしれない。未だ書簡や決定的な文献資料などが発見されていないことから，同種ついては引き続き検討の余地がある。

図 9　ファイヤーグロー

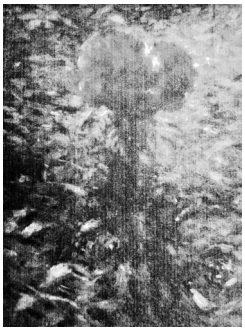

図 10　白瀧幾之助《鶏頭》（昭和初期）個人蔵

図 11　白瀧幾之助《鶏頭》（大正～昭和期）個人蔵

結論

本論では白瀧幾之助と坂田武雄が親戚だったという事実を踏まえ，特徴的な形状をした《ペチュニア》2 点と《鶏頭》を取り上げて白瀧の作品制作への影響について調査研究を進めた。その結果，前者については，坂田が開発した八重咲きのペチュニアと色や形状の共通点が見

出され，これらを絵の題材にした可能性が極めて高いという結論に至った。また，後者についても坂田が昭和 39 年（1964）に発表して AAS の受賞を果たした「ファイヤー・グロー」と色や形状が酷似していることが明らかになり，その関連性が指摘できる。かつて白瀧は坂田から花の絵の揮毫を依頼されることもあったが，本論で取り上げた作品については白瀧の自宅で保管されていたため，依頼作品ではないだろう。あくまで彼自身が新しい花に興味を抱いて筆を執ったものと考えられる。

指導的な立場に立ち，洋画の発展を意識した白瀧が，これまでにない姿をした新しい花に目を向けたことは想像に難くない。また，近代園芸と花の作品という新たな視点は，他作家の場合でも関連性を指摘できる可能性があるのではないか。しかし，品種数が増加した現代には，生み出された花の年代の特定は困難になったともいえるだろう。言い換えれば，描かれた花の開発時期などが明らかになれば，本研究のように作品の制作背景が表面化し，制作年代の特定にもつながる可能性がある。そして，その画家の潜在的な個性を見出す道標となり得るのだ。

坂田武雄はペチュニアや鶏頭の他にも，薔薇やパンジーをはじめ様々な植物の改良と育成を行っていた。当時を述懐する文章では「坂田老人が AAS で果たした二十四回にものぼる入賞のうち，そのちょうど三分の一に当たる八つの入賞がペチュニアのいろいろな品種で占められていることは，いかにも「ペチュニアの坂田」にふさわしいことだった。残りの入賞した花には，鶏頭，パンジー，金魚草，矢車草，矮性カーネーション，葵，木槿，朝顔などがあり，野菜では戦後の新種である一代交配のキャベツが三種類，入賞している」[26] と，さまざまな新品種を発表していたことが綴られている。AAS の受賞歴に限ると，白瀧の生前に賞を得たものはペチュニアと鶏頭のみである。しかし，当然ながら坂田が白瀧の生前に取り扱っていた花はこれに限らない。白瀧自身も，本論で紹介した花以外にパンジー，芍薬，百合，牡丹，菊，椿，ミモザ，紫陽花など多種多様の花の絵を描いている。とりわけ薔薇については小ぶりの花，大ぶりの花，多色その品種の差が明瞭に看取される。今後の課題として，引き続き白瀧が制作した花の絵の調査を進め，どのように作品と向き合ってきたのか，その画業のさらなる解明に繋げたい。

註

1　この事実は，2018 年に白瀧幾之助の実孫・木戸恵美氏にお話を伺った際に明らかになった。
2　姫路市立美術館『白瀧幾之助展 ── 没後 50 年 ──』姫路市美術館，2010
3　大木英吉『花筐：坂田武雄の足跡』坂田種苗株式会社，1981，pp.1–130
4　坂田富美「兄武雄と間島様とのお交際の思い出」坂田正之編『種子に生きる：坂田武雄追想録』坂田種苗株式会社，1980，p.421

5　坂田正之「武雄の生い立ち」坂田正之編『種子に生きる：坂田武雄追想録』坂田種苗株式会社，1980，p.133
6　阿部亜紀「『白瀧幾之助写真群』について」『生活造形』京都女子大学生活造形学科，2021
7　坂田正之，前掲注，p.132
8　同上 .p.133
9　同上 .p.133
10 同上 .p.133
11 同上 .p.133
12 白瀧幾之助「油絵講義」『洋画講義』日本美術院，刊年不詳，p.98-99
13 植田善蔵『田園趣味家庭園芸詳説』駸々堂書店，1926，p.46-47
14 大木英吉，前掲注，p.92
15 同上 .p.92
16 同上 .p.94
17 AAS とは 1932 年にアメリカ，カナダの一般園芸愛好家に対し新しい花や野菜の優良品種を紹介・普及を目的として発足した非営利機関で，世界の主要な種苗会社が競って新しい育成品種を出品する園芸業界で最も権威のある業界団体である。
18 中山龍二「坂田武雄の花の生涯」『リーダーズダイジェスト』29(5)，日本リーダーズダイジェスト社，1974，p69-70
19 大木英吉「オールアメリカセレクション入賞品種年次順一覧」『花筐：坂田武雄の足跡』坂田種苗株式会社，1981
20 農業共済新聞「続日本の『農』を拓いた先人たち（57）ガーデニング・ブームの火付け役，「サフィニア」育成に研究者の誇り」2004 年 4 月（2）
21 井上裕紀子「中国の吉祥モチーフについて」『哲学会誌』（27），2003，p84
22 白瀧幾之助，前掲注，p.101
23 Wm. Henry Maule and Henry G. Gilbert Nursery, *Maule's SEED BOOK: 1941 Alternative: 64th year*, 1941, p.65
24 植村猶行「優れた花の育成を企業化された人」坂田正之編『種子に生きる：坂田武雄追想録』坂田種苗株式会社，1980，p.168
25 三上糸世「若き日の坂田さんを偲んで」坂田正之編『種子に生きる：坂田武雄追想録』坂田種苗株式会社，1980，p.418
26 中山龍二，前掲注，p.74

画像出典
図 1 「白瀧幾之助肖像」白瀧幾之助写真群より
図 2 「（左）坂田武雄（右）白瀧幾之助」白瀧幾之助写真群より
図 3　坂田正之編『種子に生きる：坂田武雄追想録』坂田種苗株式会社，1980，pp1-525 より
図 4　白瀧幾之助《ペチュニア》（1938 年頃）個人蔵 39.0 × 47.0
図 5　白瀧幾之助《ペチュニア》（1938 年頃）個人蔵 41.5 × 33.0
図 6　中山龍二「坂田武雄の花の生涯」『リーダーズダイジェスト』29(5)，日本リーダーズダイジェスト社，1974，p70 より
図 7　白瀧幾之助《鶏頭》（大正～昭和期）個人蔵　45.5 × 33.5

図 8　Wm. Henry Maule and Henry G. Gilbert Nursery, Maule's SEED BOOK: 1941 Alternative: 64th year, 1941, p.65 より

図 9　サカタのタネ「100 年を彩った品種たち：Episode 17 ケイトウ　日本の伝統的な花・ケイトウを世界に広める」より

図 10 白瀧幾之助《鶏頭》（昭和初期）個人蔵 46.0 × 33.5

図 11 白瀧幾之助《鶏頭》（大正〜昭和期）個人蔵 41.0 × 27.5

Petunia and *Cockscomb* painted by Ikunosuke Shirataki: Focusing on the Relationship with Takeo Sakata, Founder of Sakata Seed Cooperation

ABE, Aki

Shirataki Ikunosuke (1873–1960) was one of the leading Japanese Western-style painters of the late 19th to early 20th century. Although Shirataki worked with a variety of subjects. While flowers have been a frequently painted motif for many artists and Shirataki is no exception, to date there has been no in-depth study of Shirataki's flower paintings. An important discovery of this research is the revelation that Shirataki was a distant relative of Takeo Sakata (1888–1984), the founder of Sakata Seed Corporation, the leading seedling company in Japan. This research focuses on Shirataki's paintings of the petunia and the cockscomb, the two flowers that Sakata Takeo successfully created new breeds of. In the case of the petunia, Sakata's breed won the second prize at the 1935 All-America Selections competition. Two paintings of this petunia by Shirataki show its distinctive characteristics, such as its world-first double-petal form. Similar is the case of the cockscomb, of which Sakata created multiple new breeds. One of these new breeds found its way into Shirataki's paintings. The relationship between Shirataki and Sakata allows us to gain a new perspective on modern horticulture and floral works, from which we may be able to point out the relevance of modern horticulture to other artists when they depict floral and botanical motifs. The author posits that while previous studies on the iconography of flowers are one crucial element to understanding the meanings behind paintings, the history of their creation examined in this research is another no less important but sometimes overlooked aspect.